

巻頭言

韓国のキャンドル集会

唐木 英明

日本学術会議副会長・日本農学アカデミー副会長

2008年6月初旬、韓国大使館のF氏から突然の連絡があった。彼の用件は聞くまでもなく想像できた。当時、韓国では米国産牛肉の輸入条件を緩和しようとする政府の措置に反対する大きな抗議デモが毎日続き、参加者が焼身自殺を図るなどの騒動も起こっていた。その影響で、就任したばかりのイ・ミョンバク大統領の支持率が3月上旬には60%近くもあったが、その後わずか3カ月足らずで歴代最低の10%台にまで急落し、窮地に追い込まれていたのだ。そこで、同じように大きな社会問題になり、ほぼ沈静化した日本のBSE騒動について調査を行っているので話を聞きたいということであった。

イ・ミョンバク大統領は私と同じ1941年生まれ。大阪で生まれて4歳のときに韓国に移住した。貧困の中で大学を出たが、学生時代は日韓条約反対運動で逮捕されたこともあるという。卒業後は社員数十名の零細企業だった現代建設に入社し、36歳で社長に就任し、会社を社員16万人の大企業に育て上げた。その後、国会議員からソウル市長になり、ソウル中心部を通る高速道路を撤去して小川を復元し、市民の憩いの場にするなどの実行力を発揮し、韓国でもっとも有名な一人になった。そして、ついに2007年12月に韓国大統領に就任したばかりだった。

電話の2、3日後に私は地下鉄麻布十番駅でF氏と待ち合わせた。入梅直前の晴天で暑い日だった。この辺を知っているのかとたずねられ、よく知らないと答えると、F氏は大使館に行く途中にある善福寺を案内してくれた。ここに最初のアメリカ合衆国公使館が設けられ、タウンゼンド・ハリス公使が住んでいたことも、福沢諭吉の墓があることも私は知らなかった。境内にある樹齢750年以上といわれるイチョウの巨大な幹が力強かった。

韓国大使館は善福寺から歩いて数分の仙台坂の途中にある。坂の上には有栖川記念公園や秋篠宮妃が男子を出産された愛育病院もある。この一帯は韓国だけでなくフランス、ドイツ、フィンランド、ノルウェー、オーストリア、ルーマニア、アルゼンチン、パキスタン、ラオス、スロバキアなど多くの国の大使館が集まっている場所でもあり、坂を下りて二の橋から反対側の坂を上るとオーストラリアやイタリアの大使館、そして慶応義塾大学三田校舎もある。私は韓国大使館の前は通ったことがあるが、今回初めて館内に入った。玄関に続い

て広いロビーがあり、その一角の応接コーナーでF氏から韓国の様子を聞いた。

韓国では2008年2月にイ・ミョンバク大統領が就任し、福田首相や米国ライス国務長官など各国首脳が就任式に出席した。落ち込んでいた韓国経済の再建を旗印にして当選した大統領が最初に取り組んだのが、米国との間で自由貿易協定を結ぶことだった。これに対して米国は米国産牛肉の輸入拡大を韓国側に求めていた。

日本と違って韓国はBSEがない国だが、日本と同様に、多くの牛肉を米国から輸入していた。しかし、米国でBSEが発見された2003年12月、韓国は米国からの牛肉の輸入を停止した。韓国産の牛肉は日本の和牛と同じで高価だが、米国産牛肉の輸入が止まったために牛肉の量が不足して、その価格はさらに高騰した。安価な米国産牛肉が使えないことは韓国料理の代表である焼肉に大きな影響を与え、豚カルビや豚トロなどの形で豚肉が焼肉に使われるようになった。これは日本の状況とよく似ている。

輸入停止から約2年後の2005年10月、韓国は30カ月齢未満の骨なし牛肉に限って輸入を再開した。日本が20カ月齢未満の骨なし牛肉に限って輸入再開をする2ヶ月前だった。当時、米韓両国間で問題になったのは、わずかな骨片が含まれていただけでも輸出承認の取り消しになるなどの厳しい再開の条件だった。米国側は、1日に何千頭もの牛を流れ作業で処理する大規模施設において小さな骨の破片の混入は避けられないこと、そもそも骨にはBSEの病原体が蓄積することはないことから、この条件の緩和を要求した。しかし韓国側はこれを拒否して、厳しい条件のまま輸入が再開された。そして米国側の懸念の通り、輸入された牛肉から骨片が何回か発見され、ついに2007年7月には輸入が再び停止になった。これもまた日本とよく似た状況である。

その後、両国の折衝が続き、新任のイ・ミョンバク大統領の初めての訪米に先立つ2008年4月18日、韓国は事実上無条件で米国産牛肉を輸入することに合意したのだった。

その直後の4月23日、私は天皇皇后両陛下が主催する晩餐会に招待を受けた。赤坂のホテルで行われた晩餐会の出席者は全員タキシードとイブニングドレスの正装だった。天皇陛下のご挨拶に続いてシャンペンで乾杯し、ワインとフランス料理の晩餐が続いた。食事が終わり、両陛下が退席された後、近くの席に座っておられたシーファー駐日米国大使と雑談をした。当時、日本が生後20ヶ月未満の骨なし牛肉しか輸入しないために、日本への牛肉の輸出量は以前に比べて大幅に減っていることについて大使は不満を述べ、「韓国が米国産牛肉を全面的に受け入れたのは非常に満足だ。次は日本が同様の判断をして欲しい」という話をされた。私は「韓国がそのような決定をしたからといって、日本がすぐに同じことをすることはとても考えられない。韓国では消費者は本当に納

得しているのだろうか？」と答えた。そして、私の悪い予感が的中したのだった。

イ・ミョンバク大統領が推し進めていた自由貿易協定には、野党を中心に反対が強かった。協定により米国の安い農産物が多量に輸入され、韓国の農業が破壊される恐れがあるというのがその理由だ。しかし、中小企業を大企業に育て上げ、ソウル市長としても大きな実績を上げ、国民の高い支持を受けて就任した大統領に野党も正面切って反対はできないでいた。そこに出てきたのが米国産牛肉輸入条件の緩和である。野党はこれを全面的に利用して反政府運動を展開した。牛肉の輸入条件の緩和は大統領の訪米と自由貿易協定の批准に向けた拙速な合意であり、韓国国民がBSEに感染するリスクを拡大させ、その健康と生命を軽視しているというものだ。

これに火をつけたのが韓国 MBC テレビの人気報道番組『PD 手帳』だった。4月初めに米国で通常のヤコブ病で死亡した女性の死因がBSEに感染したことによる新型ヤコブ病だったという虚偽の報道を4月29日に行ったのだ。もちろん米国疾病対策センターは直ちにこれを公式に否定したが、この報道をきっかけにして韓国のインターネットにはBSEに対する恐怖をあおる怪情報が飛び交った。2008年5月16日付けの「アン・ヨンヒの韓国レポート*」によれば、こんなうわさ話が流されたという。

(* http://ryumurakami.jmm.co.jp/dynamic/report/report7_1282.html)

1. 牛の組織を利用した化粧品、生理用品など600種の製品を使うとBSEに感染する。
2. まな板、包丁、水道からもBSEは伝染する。
3. 米国人は米国産牛肉を食べないでオーストラリア産などを食べている。
4. 韓国人の95%がBSEに感染しやすい遺伝子を持つ。
5. 米国で30ヶ月齢以上の牛肉は犬や猫の飼料にも使わない。
6. 米国人が食べる牛肉と韓国に輸出する牛肉は違う。
7. 米国の約500万人の認知症患者のうち25~65万人がBSE。
8. 肉の部分だけ食べてもBSEになる。
9. プリオンは600度以上の高熱でも破壊できない不死の病原菌。
10. キスだけでBSEに感染する。

かつての日本でも聞いたような作り話だが、こんな偽情報を信じて携帯メールで連絡しあった若者たちが街に出て、ソウル市内の光化門でキャンドル集会を始めた。

このキャンドル集会の背景には韓国国民の米国に対する怒りの記憶があった。

2000年6月、女子中学生2名が米軍装甲車に轢かれて死亡した。ところが、米軍による裁判の結果、車両を運転していた米兵2名は無罪になった。これを知って韓国人の怒りが爆発。11月にはソウル市内の光化門には連日火をともしたキャンドルを持った市民が集まり、追悼と抗議のための集会が行われた。抗議運動はソウルから韓国全土に広まり、講義の嵐の中でラムズフェルド米国防長官はペンタゴンで行われた記者会見で謝罪を行い、さらにアーミテージ国務副長官が韓国を訪問してキム・デジュン大統領に直接謝罪する事態に発展した。その後、追悼集会は次第に過激な反米デモに変わり、警察の取締りを受けて沈静化していったが、この事件は人々の心の中に硬いしこりを残していた。

それから8年後、韓国政府による米国産牛肉の輸入条件の突然の緩和は米国の圧力によるものだという野党のキャンペーンが人々の心に素直にしみ込んだ。米国は韓国人の健康と命をまたもや無視したという怒りの高まりの中で、8年前と同じキャンドル集会が復活したのだった。集会は日増しに勢いを増し、6月10日の集会にはソウル都心だけで50万人が参加、過去最大規模になった。また全国80の市町村でも同時に集会が開催された。デモの参加者には中高生も多く、「米国産牛肉は帰れ」、「BSEの牛は大統領が食べ」などのシュプレヒコールを叫び、「私はまだ15歳（まだBSEなんかで死にたくない）」というプラカードとキャンドルを持った少女の写真が新聞紙面を飾った。

私がF氏に会ったのはこの大きなデモの直後であった。私が彼に話したことは、ここまで大きくなった反対運動を鎮めるための妙案はないが、政府が食品の安全を守るという強い姿勢を示すことが大事であり、あとは時間が解決してくれるのを待つしかないだろうということで、はなはだ頼りにならないアドバイスだった。

事態は私の予測よりはるかに早く進展し、その数日後に大きな展開があった。キャンドル集会を主導してきた「狂牛病牛肉全面輸入に反対する国民対策会議」は、韓国政府が米国と牛肉輸入条件の見直しについて再交渉することを要求し、それが実現しなければイ・ミョンバク政権の退陣を求める闘争を開始すると宣言した。メディアだけでなく北朝鮮の政治団体までもがキャンドル集会を支持し、韓国政府を非難する談話を相次いで出した。

韓国政府はついに方針を転換して、牛肉の輸入条件について米国と再交渉を始めることを決めた。イ・ミョンバク大統領は6月19日に謝罪会見を行い、6月10日のキャンドル集会の際、大統領府の裏山に登って深く反省したという事実を告白して、「米国産牛肉の輸入に関する公示は無期限延期にする」と述べた。米韓両国の協議の結果、6月22日、輸入条件緩和の合意は取り消さないが、米国の牛肉輸出業者が「自発的」に生後30ヶ月以下の骨なし牛肉だけを輸出するという政治的な決着が行われた。これで問題は解決に向かい、6月

26日に米国産牛肉の輸入が再開された。

不思議なことに、あれだけ大きな反対運動が起こっていたにもかかわらず、輸入された米国産牛肉の売れ行きは上々だった。米国農務省の統計によれば、輸入再開から3カ月後の11月には韓国は米国産牛肉の最大の輸入国となっている。最近私は韓国に行っていないが、焼肉の値段も下がったのではないだろうか。

輸入再開と同時に韓国政府は、MBCテレビの報道番組『PD手帳』が米国産牛肉の狂牛病リスクを誇張して政府の名誉を傷つけたとして訴訟を起こした。8月にはMBCテレビが放送内容に間違いや誇張があったことを認めて謝罪し、番組担当者は虚偽の報道を行った疑いで逮捕された。こうして状況は180度変わり、5月から週末ごとにソウル都心部で続けられたキャンドル集会在終結した。デモの際、警察官に塩酸入りの瓶を投げつけたり、警察のバスを破壊したり、「警察官が女子大生を殺害した」というデマをインターネット上に流すなどの容疑による逮捕者の裁判も行われた。

韓国でのBSE騒動の顛末を眺めていると、日本とよく似た点と、まったく違う点がある。違う点の一つはBSE検査である。日本にはBSEがあるので、30ヶ月以上の食用牛はすべてBSE検査を行っている。一方、BSEがない国である韓国では、国際獣疫事務局の指針に従って、BSEの疑いがある症状を示す牛、神経症状がある牛、へたり牛などのいわゆる高リスク牛、そして30ヶ月齢以上の牛の中から一部を選び出した牛についてだけBSE検査を行っている。このような抽出検査の結果、韓国ではBSEは1頭も発見されていない。

米国でBSEが発見されたとき、日本では、「米国に全頭検査の実施を要求しろ！それが輸入再開の条件だ！」という声が起こった。そして、いまだにそうすべきだと考えている人もいるようだ。ところが、あれだけのあらゆる種類のデマが飛びかった韓国でも、「全頭検査をしないから米国産牛肉は危険」などという話はまったく出ていない。欧米では「全頭検査神話」などが存在しないが、韓国にもそんな神話を信じる人はいないようだ。

だからといって韓国が日本より科学的とはいえない。韓国大使館のF氏に尋ねたところ、ごく最近になって韓国でも日本と同様の全頭検査を行うべき、あるいは30ヶ月齢以上の食用牛の検査を行うべきという主張が出てきて、済州道では2009年1月から独自にすべての食用牛のBSE検査を始めたという。BSEがない韓国でなぜこのような動きが出たのか不思議だが、これは日本の悪影響だろうか。

多くの人々が非科学的なうわさ話を信じた点では両国まったく同じといえる。それが日本では「全頭検査」であるのに対して、韓国では「30ヶ月齢」だったようだ。ネットで流されたうわさ話の中に「米国で30ヶ月齢以上の牛肉は

犬や猫の飼料にも使わない」というものがあることから分かるように、韓国では30ヶ月齢以上の牛の肉はすべて危険だから輸入すべきではないと信じている人が多かったようだ。

また日韓両国ともに共通する大きな誤解は、牛肉のリスクを小さくする方法は検査でも月齢制限でもなく、特定危険部位を除去することであることがほとんど認識されなかった点である。

日韓両国で大きな誤解が広がった原因は共通していて、メディアの不適切な報道と、インターネットによる非科学的なうわさ話の広がりである。その背景には、科学の知識の不足や、うわさ話を簡単に信じてしまう人のよさがあるのかもしれない。情報を鵜呑みにしないで批判的に聞く訓練を学校教育に取り入れている米国では「振り込め詐欺」に引っかかる人はほとんどいないという話を聞いたが、日本人が簡単に引っかかるように、韓国人もだまされるのだろうか？

F氏の話では、韓国にも振り込め詐欺が頻発しているという。被害者は日本と同じで詐欺に対して無防備な年寄りが多く、その手口は多用で、郵便局員、警察官、銀行員、電話局職員、税務署職員などになりすますものが多いという。2009年3月にはふりこめ詐欺の被害者になった女子大生が「両親に申し訳ない」という遺書を残して自殺するという不幸な事件も起こったという。

知れば知るほど日本人と韓国人が良く似ているように見えるが、違う点は、韓国の運動が激しいことだ。激しいキャンドル集会が一段落すると、今度は虚偽の映像で恐怖をあおったテレビ番組関係者が逮捕され、キャンドル集会を組織した暴力的な活動家たちが逮捕された。一方、キャンドル集会側も反政府の色合いを強くして、今年5月にはメーデーに引き続き米国産牛肉の輸入に反対する集会から1周年を迎えたことを記念する激しい反政府デモを行い、ソウル中心部が麻痺し、多くの逮捕者を出したという。一方、日本ではBSE問題で大きなデモなどは起こらず、問題は静かに忘れられ、全頭検査の誤解を解く試みも、誤った情報を広げたことに対する反省もないままである。我々は多少気性が違うけれど実はよく似た兄弟というところだろうか。